

# 第五篇 社会主義の啓蒙運動

## 第十五章

以上の説明によって「国体論」というものは、むしろ明らかに現代の国体と政体を打倒しようとする復古的革命論であるとわかるだろう。社会民主主義は、維新革命以後の日本国が法律上だけは堂々とした社会民主主義であることを認め、それを維持するとともに、さらに発展させるために努力するものである。しかしながら、国家の論究において、法理学上の国家と政治学上の国家はおのずから同じ考察の道をたどらない。法理学から考察された国家は、法律上に現れた国家がどのように組織されているか、国家の目的、理想がどれほどまで法律の目的、理想として表白されたかという観点から見た理論的なものである。政治学から論究された国家は、法律を超えて国家の目的、理想などを論じるとともに、国家を現実のありのままに法律上に現した国家の組織がどのように活動しているか、法律に表白された国家の目的、理想がどのように実現されているのかという観点から見た事実論である。

### 15-1 法律と政治 —国家は否定されるべきか—

法律とは国家の理想を表すものである。政治とは国家の現実的活動である。全ての者がこの明白な区別を明らかにしないため、上層階級は社会の利益を図ると標榜する社会主義者を迫害しようとして、逆に社会そのものの名において行う。社会主義者もまた上層階級を国家の名の下で否認すべきであるにもかかわらず、逆に国家そのものを一掃しようと言言し、自ら論理的な絞首台にかかっているのである。社会の利益のために、土地及びあらゆる生産機関の公有を主張する社会主義者は、単に社会が最高の所有権者であると規定する法律の理想を実現しようとする忠実な法律の遵守者であって、決して法律に背くという理由で迫害することができないのは言うまでもない。また、社会主義者という者も、穂積博士のように天皇だけが国家であるとか、アメリカのバルジェス<sup>1</sup>のように、議会だけを国家であると名付けるほど無知でないならば、次のように言えるだろう。「労働者は国家を持たない」と激しく語るマルクスの宣言を信仰箇条とし、それに基づいて国家そのものの否定を言言し、国家の部分である自分を否定し、国家が将来進化することで到来するであろう理想国家をも否定するようになるといった論理矛盾に至らないと。科学的社会主義は、二千年前の太古に掲げられたプラトンの理想国家論という源泉から流れてきた大河である。プラトンは言う。「国家は個人の総体であり、個人は国家の部分である。」<sup>2</sup>と。

<sup>1</sup> John William Burgess (一八四四—一九三一) のこと。アメリカの憲法学者で、『比較憲法論』などの著書がある。

<sup>2</sup> 第四篇での引用では、「国家」は「社会」と表現されている。

そして現代の法律を見よ。どこに天皇だけが国家であり、上層階級だけが国家であると規定しているのか。また、どこに労働者は国家ではなく、小作人は国家の部分ではないと規定しているのか。ある者は言うだろう。「上層階級が国家の全ての機関を占有し、上層階級の意志が国家の意志であるとされるから、国家は否定されるべきだ。」と。それならば、上層階級の意志を形成しない上層階級の子供は国家の外にいる者である。国家の全ての部分が政治上の権力者として意志を表白するようになった後であっても、全ての社会の子供は国家の意志を形成しないから、それらは国家の部分ではなく、年長者だけが国家であると言うのか。あの普通選挙の要求は、社会主義を国家の意志にしようとする目的のために行われているのであり、普通選挙を叫びながら、国家を否定することは社会主義を理解しない無理想の盲動者の行動である<sup>3</sup>。国家を否定するならば、どうして否定すべき国家に土地を所有させようとする自己の主張を否定しないのか。否定された国家は空虚な国家であって、空虚な国家は公有にされた生産機関を所有することができないのである。上層階級がただ自分たちだけが国家であると考えようとも、社会主義者は彼らの横暴に対し、「それなら、我々は国家を否定する」というような横暴によって反撃するべきではないのだ。

彼らはもちろん国家の中にいる進化した(物質的もしくは精神的に)国家の部分である。しかしながら国家は、他の未だ進化していない国家の部分である下層階級をも含めて国家なのである。国家は、フランス革命時代の個人主義のように、原始的個人を仮定することを通じて、個人の意志によって旧社会を解体し、新しい国家を組織するというように考えられるべきものではない。個人は決して原始時代にも個人として存在していたことなどない。墓に入るときにも社会を形成する。個人主義の革命論は国家を解散させ、さらに自由・平等を基礎として国家を組織しようとした。だから国家の否定は、新しい国家を建設することを前提とする限りは論理的に維持できる。しかしながら、社会主義の厳肅な科学的基礎から見れば、国家は決して個人が自由に解散させたり、組織させたりできるといった機械的に作られるものではない。革命とは、国家の意志が時代の進化に従って社会的勢力とともに進化するということなのだ。だから、今日の国家において今日の上層階級の意志が国家の意志とされるのは、上層階級が今日の社会的勢力の上に立っているためである。もしこれを理由として今日の国家が否定されるならば、同じ論理によって近代の社会的勢力の上に立って国家の意志となるはずの社会主義は、国家の意志ではないとして否定されなければならない。—敢えて日本に限らず、今の社会主義者のほとんど全ては純粋な個人主義者であり、社会主義を単にフランス革命をもう一度行うのと同じだと理解しているようである。

法理学上の国家と政治学上の国家の違いを明らかに理解せよ。法理学上の国家は、国家

---

<sup>3</sup> この指摘は必ずしも言いすぎではない。マルクスの考えを忠実に受け入れていた初期のマルクス主義は、議会を階級支配の道具と捉えていたため、そこに加わることなどナンセンスであると考えていた。そのため、あくまで直接行動に訴えるべきだと考えていた。しかし実際の所、厳格に直接行動を訴えても、現状の変革に難儀する結果となったため、議会へ進出する道が探られたのである。ペルンシュタインらが漸進的社会主義を唱えた背景には、このような事情があった。

主権の社会主義である。しかしながら、全ての政治的勢力は経済的勢力に基づくから、今日の経済的階級国家は、政治上において実質上の階級国家を出現させることを表しているのだ。これが、社会民主主義が経済的方面における革命に着手した理由であり、一方でその革命が現在の法律を是認し、法律戦争によって優勝を決定している理由である。

法律そのものから階級国家を表し、主権が上層階級にあるならば、社会主義者の努力は単に上層階級に帰属する利益を擁護するためのものにすぎない。上層階級が目的に背くと考える時には、直ちに全ての努力が取り消されるという論理であり、まず議会に入ることから拒絶しなければならない。ここに至ると、あのフランス革命とか、維新革命とか、また今日の無政府党員の行動とか言うものは、理論としては社会主義者という者ほどの矛盾がない。我々は信じている——社会民主主義の革命は、フランス革命もしくは維新革命のような法律的革命の理想を完全に現実のものにしようとするため、法律の下において行う経済的革命であると。あのベーベル<sup>4</sup>が、「フランスがもしドイツの挑戦を受けた時には、国家の名においてこの挑戦に応戦する正当防衛権がある」と言ったことは、我々が主張していること——現代は国家がそれ自身の目的、理想を持っていると意識されるようになった国家主権の時代であること——を表白しているものである。ジョレス<sup>5</sup>の見解に打ち勝って、現在の国家が階級国家であると主張し、国家そのものの否認を決議したインターナショナルの大会には矛盾がある。我々はさらに断言する——社会主義の革命は、フランス革命もしくは維新革命のように、主権の所在を動かそうとする、つまり法律の根拠そのものを一新する法律以上の実力に訴えられる革命ではない。確定された社会の主権上で、社会の意志である社会的勢力を法律上表白すればよいのだと。だから社会主義の経済的革命は、先の法律的革命のように、歴史のページを血で染めるものではない。また、革命家自身にとってもそれほど壮絶なものではない。言わば第一革命の法律的理想と矛盾する現在の経済的組織を整頓し、理想を現実のものにすれば足りる。だから我々は、先に維新革命が法律上社会民主主義であることを説明したことに続け、社会主義の経済的方面である土地、資本の国有化を「経済的維新革命」と名付ける。

## 15-2 維新革命の完結と現実の国家

まさに、維新革命の完全な実現は、国家が生存して進化する目的、理想のため、自由に行動できるとする法律的源泉を公有化することによる。そのためには、経済的源泉である土地、資本をさらに公有化し、国家の生存進化の目的、理想を現実のものにすることが必要である。多くの君主らがそれぞれ主権の本体として、法律的源泉を自己の利益のために自己の財産権として行使していた貴族国から、維新革命によって法律的源泉が国の所有に移され、国家主権の社会主義が法律上表された。それと同じように、法律上表された国家

---

<sup>4</sup> ドイツの社会主義者。若くして労働運動に参加し、ドイツの軍国主義政策に終始反対した。社会民主党の指導者として活躍した。

<sup>5</sup> ジョレスはフランスの政治家で、社会党の指導者（一八五九—一九一四）。平和論を主張していたが、第一次世界大戦の前夜に国粋主義者によって暗殺された。

の主権により、多くの経済的家長君主らがそれぞれ自己を利益の帰属する主体と考え、経済的源泉を私有している経済的貴族国を打倒し、経済的公民国家を成立させようとするのが目的である。維新革命はもちろん経済的基礎からの革命であった。貴族階級だけが私有財産を持ち、下層階級は単に使用权を持つにすぎなかったところ、国家が権利を付与して、民主主義の根底である私有財産制を確立した。維新革命は法律の根本において明らかに社会民主主義である。それなのに、今やどんな状態であろうか。

維新革命によって得た法理学上の国家を見て、政治的に国家の現実に目を移す時、我々は完全に天国から地獄に落とされるような思いになる。我々は「愛国」の名において国家の利益と目的を中心として行動していくべき法律的理想と倫理的信念を持っている。しかし、これを経済上の現実から考えれば、我々は家長国、階級国家時代のように、無数の黄金貴族、経済的大名が生存して進化するための犠牲として取り扱われている。法律学と倫理学は我々を人格として扱っているにもかかわらず、率直な経済学は黄金大名が自由に売買できる物格として取り扱っている。我々は、法理学上は日本帝国の部分であり、国家の部分である点において生存進化の目的を持つ。しかしながら経済学上から見ると、地主の目的のために、手段として存在し、工場主の利益のために犠牲として死ぬべきものである——つまり、国家の部分ではないということになる。我々は土地とともに売買される農奴であり、賃金で縛られた奴隷なのだ。地主という黄金貴族は土地を私有し、我々を農奴にする。資本家という経済的諸侯は工場の封建城郭を拠点として、我々を素町人として扱う。そしてかつての武士階級が武芸によって貴族の下で隷属し、下級の階級に威力を発揮したように、哀れむべき紳士は学術と事務の才能で権威をもてあそんでいる（噴き出したくなるコントラストだ!）。全てのことは天皇の名において、国家の主権においてなされる。けれど、現実の日本国というものは天皇主権論の時代でもなければ、国家主権論の世でもないとなされ、資本家が主権を持っているかのような資本家万能の状態である。大臣も資本家の後援によって立ち、議員も資本家にあごで使われるように動いている。このようなことから、国家の機関が国家の意志であると表明しているものは、国家の目的、理想のために国家がとろうとする意志ではない。自己もしくは自己の階級の利益だけを意識して意志を表白しているため、事実上は階級国家となっている。つまり、今日の階級は資本家、地主とか、小作人、労働者とかいうような経済的階級に分かれた国家であり、天皇とか、華族とかいう者は、社会民主主義の革命とは別世界に存在する国家の機関であって、今日は中世的意義の階級ではない<sup>6</sup>。武力によって経済的源泉を略奪した貴族は、維新革命によって法律の上から一掃された。ところが、今や資本によって他の資本家と零細な中小自作農とを併呑している経済的家長君主らはかつての君主に代わり、国家の機関を自分たち階級の好きなように取り扱っている。国家は中世の君主らの手から武器を奪い、腕力による併呑、略奪は国内においてはなくなったが、資力というさらに鋭い兵刀は抜け目が無い、もしくは

---

<sup>6</sup> この一文の意味は明確でないが、当代は前近代のような天皇主権の時代でもなく、近代の国家主権の時代に達していない過渡的な状態であり、その点においては、階級の意味も前近代のような中世的な意味のものとは異なっているということであろう。

は幸運な男たちに資本を併呑させ、土地を略奪させている。そしてそれによって厳然とした中世的階級国家は、美しい自由・平等な法律を隠れ蓑にして立てられた。貴族政治は明白に存在する。どこに維新革命があるのか。国家の名において要求されたというのに、維新革命によって得た国家はどこにあるのか。アメリカの人民が「自由の国」の名に酔って、経済的君主らが割拠していることに気づかないように、維新革命の社会民主主義は法律上にだけ姿を残し、国家は中世に逆戻りしている。

結局、目的が国家に存在するからこそ、国家の名において要求し、また国家の名において死ぬことがあるのだ。今日の社会民主主義は、プラトンの社会民主主義のように、ギリシャに限られたものではない。また維新革命のように、日本民族だけに限られたものではない。しかし、国家が政治的単位の社会であり、国家単位の連合によって国家の理想的独立と個人の絶対的自由が実現できると主張している点（『生物進化論と社会哲学』を見よ）で、現実的な国家を超越しているが、ことごとくその目的、理想を含んでいる。国家の目的のために努力する国家主義と相いれないものは、まさしく君主らの利己心のためにあらゆるものが犠牲になった中世貴族国であり、君主主義である。君主主義を掲げ、各々の君主のために犠牲として取り扱われた貴族国は、維新革命によって国家主義の名の下で、国家の利益のために打破された——ところが、今や国家の名の下でこの経済的君主らに殺されようとしている経済的階級国家をどうするか。「王侯、将軍、大臣になるのに、どうして家系や血統によるだろうか」という単純な平等主義を国体論という衣服で包み、国家のために貴族政治を打破したというならば、国家の目的にひどく背いているこの経済的貴族国が平等主義者の目にどうして映らないのだろうか。過去の貴族制度が打倒されるべき人権の侮辱を行っていたというならば、人権を非常に侮辱するこの経済的貴族の発生が、維新革命の讃美者に何の感覚も起こさないのか。そうではないのだ！ 今の経済的階級国家の群雄諸侯らはこの国家のためにこの言葉を盗み取り、貴族階級のためにするあらゆる利益と罪悪を弁護するために用いている。経済的貴族に帰属する利益と利益を帰属させようとする意志によってなされる一切のことが、逆に国家のためだとか、国家の利益になること目的としているかのように偽られる。これは君主主義であって、二、三の個人の利益を中心とする個人主義であり、国家主義ではない——少しも国家主義ではない。ソクラテスはこうした「国家」の前に毒杯を傾けたのではないか。ああ、真正な愛国者よ！ 今の黄金貴族らは貴族国を打倒した国家主義を使って、逆に経済的家長国を維持しているということをどうして見ないのか。国家主義と君主主義！ 国家主義は国家が目的であり、君主主義は主君が利益の主体となる。したがって、他のあらゆる者は犠牲となり、手段となる。この二つの矛盾——おそらく歴史上類を見ない二つの矛盾——が愛国者の前で滑らかに動いているとは何と奇怪なことだろうか。国家主義というからには、国家が他の者に対して権利を主張するように、国家の利益が経済的君主らによる踏みじられることを放任してはいけない。国家が経済的家長君主らによって好き勝手に処分されることは、国家の人格が打破されたということであって、「大日本帝国」は名を憲法という無駄紙にだけ残し、家長国の

中世に復古してしまうということである。国家は眠った目を開いて見よ——二、三の個人の利益を図る経済的君主主義は、国家の美しい衣服を奪い取って美しく飾られたものだ！中世の貴族国時代の家長君主らは、この経済的貴族らよりも露骨であった。彼らの時代には、国家の目的が理解されていなかったのだから、経済的に従属する奴隷に向かって「主君のために」という理由で死を求めた。ところが、今の経済的君主らは自己の利益だけを意識して行う生産も社会の利益のためであると言う。金の鉱山をめぐって南アフリカで争うことも、砂糖をキューバで独占しようとするのも、国家主義を掲げて国家のためであると主張する。個人の権威は著しく進化した。かつて奴隷階級の武士は、下層階級に向かっては虎の威を振るったにもかかわらず、仕える貴族に対しては猫のように土下座することを道徳的義務として少しも疑わなかった。ところが、今日の紳士という経済的武士階級は、下層階級に対して依然として権威をもてあそぶにもかかわらず、仕える経済的貴族の前にヒラタグモ<sup>8</sup>のようになる喜劇を見られることを恥とする。これは平等観が発展した証であり、権利思想が進化したためであることは言うまでもない。「主君のために」という言葉は、カーネギー<sup>9</sup>国王であっても、モルガン<sup>9</sup>陛下であっても、三井、岩崎であっても、口にできる言葉ではない。だから、言うのだ。「国家のために」と。

ああ、国家のために！ 自由という像が羊のような狼として承認された時<sup>10</sup>、驚くべき抑圧、虐待が常に自由の名においてなされた。それと同じく、維新革命によって得た国家が第二の経済的貴族らの占拠する所となつてから、全ての愛国者はむしろ国家の名において迫害されようとしている（我々は愛国者と言うが、それを聞けば個人主義の革命家は常に笑うのだ）。社会主義は、近代に入ってようやく忠君から目覚めた愛国心をさらに他の国家に拡充させ、他の国家の自由・独立を尊重する愛国心である。自ら「最高の所有権」を持っているはずの国家というものが、どういう理由から土地と資本を国家の所有にしようとする社会民主主義が秩序を乱すものだと言い、安寧幸福を傷つけると名付けて迫害するのか。いや！ 決して国家の迫害ではない。国家という手袋を脱ぎとらせよ。資本家の筋の張った鉄拳が明らかに見えるだろう。昔、ロラン夫人<sup>11</sup>が断頭台に昇る時に自由という像を指して言った。「おお自由よ！ いかにも多くの罪悪がお前の名において行われたことか！」と。経済的君主の家老である大臣も国家のためと言っている。黄金貴族の武士である議員も国家のためと述べている。村長も、巡査も国家のためと説いている。遊女のカッポレ<sup>12</sup>に

7 ボーア戦争のことを指す。一八九九年、イギリスはボーア人の建てた南アフリカのトランスバール共和国の支配を企て戦争を起こした。一九〇二年に、トランスバールがイギリスに降伏し、以後イギリスの植民地となった。

8 ヒラタグモは、体長が一センチほどのクモ。家の中に住んで壁などに丸く平たい巣を作り、その中に隠れてエサを捕まえる。

9 モルガンはアメリカの実業家。鉄鋼トラスト、鉄道、海運、鉱業などに広範な支配網を築いた。

10 原文には「自由の像が綿羊の狼に奉ぜられたる時」となっていて、「奉ぜられたる」の横に〔封カ〕と注記されている。確かに、指摘のように「封ぜられたる」としたほうがよいと思うが、「綿羊の狼」という表現はよくわからない。よって本文の訳は意識である。

11 原文では「マダム、ローランド」となっているが、第三編第五章では、「ローランド夫人」（ロラン夫人）と記載されていた。

12 原文では「カッポレ」とは、歌舞伎舞踊の一つ。

も「国家のために」という文句が出てきて、売春婦のような令夫人の夜会遊びでも、「国家のために」という冒頭で開会の辞が述べられている。——そして社会党の迫害においても、まさしく「国家のために」と名付けられたものに従い、国家の断頭台が用いられているのである。自由の名に酔う時に専制は現れて、真実の自由を絞殺し、国家主義の声に狂っている時に君主主義はその陰に潜み、最も理想的な愛国者を攻撃している。

我々は、国家を理解せずに国家主義を叫んでいる現代の日本国民を排すとも、等しく国家を理解せず、国家を理解しない国民から迫害されている現代日本の社会党を賞賛するものではない。しかしながら、至る所で受ける迫害に敢然と抵抗し、天下をさすらう様がどうしてさっそうとしていて、維新革命党の彼らに似ているのだろうか（志士は幸いにも「健闘せよ」と言うだろう）。

### 15-3 社会主義者への迫害とそれに対する報復

今の社会民主主義者は、維新革命の社会民主主義を経済的革命によって完備させようとする経済的維新革命党である。革命党が迫害されるのは、社会的勢力を集中しないうちは社会の進化の常である。維新の革命党が貴族らの屈従から脱して浪人となったように、彼らの上品な頭では官吏となったり、会社員となったりすることができず、まず経済的強迫の下で浮浪者とならなければならない。そして幕府、諸侯の警備人が維新革命の宣伝者に行く所で迫害したように、放尿という判決権以外に何も持たない警察官の下で、堂々とした学者が、言論、集会、書物の発刊、身体そのものの自由も脅迫され、剥奪されているのだ。あの維新革命の元勳である伊藤博文氏に率いられた政党内閣——政党内閣とは明白に穂積忠臣らも言うように、慣習憲法による共和政体の樹立であり、維新革命党が貴族政治を打倒して民主主義が成立しているにもかかわらず——によって、「社会民主党」の結社は乱臣賊子であるとして禁止された。今の官吏らは、日本国民の全てが乱臣賊子の子孫もしくはその加担者の子孫であり、自身の内心も全く独立した思想で満たされているにもかかわらず、「社会平民主義」<sup>13</sup>と言うものの意味を暗号であろうかといひ加減に推測し、いつか縄にかけてやろうと待ち構えている。かつての維新革命党にとって、東の山にも、西の海にも身を隠す場所がなかった（ああ、彼らはフランス革命家のように世界の感謝をも得ることがなく、むやみに君主主義者と誤られ、いかに多くの英雄たちが土に葬られたことか！）ように、経済的維新革命党の後ろには、どこに行くにも国家の費用で養われている人面犬が尾行している。そして「弁士中止」<sup>14</sup>と言われ、警察署に引っ張られ、牢獄に入れられる。——その理由として言う。「国家のためである。」と。

ああ、国家のために！ 国家のためと信じて死体を満州、朝鮮の野に晒した国民は、国家のために苦しんでいる社会民主主義者を発見し、迫害に加わる国民ではない。ロシア国

<sup>13</sup> 原文ではこの通りだが、「社会平民主義」という語は、聞き慣れない表現であるし、これまでにでてきたことがない。北は平民主義に必ずしも好意的でないことを考えると、用語としては怪しい。「社会民主主義」の誤りの可能性がある。

<sup>14</sup> 戦前には、演説会などを特高警察が監視し、激しい政府攻撃の演説があると、弁論を中止させていたと言われる。「弁士中止」というのは、「演説をやめよ」という命令である。戦時中の翼賛選挙においては、これは特に激しかった。

民は臆病だからではなく、国家のためにならないことを明らかに理解したため、極東の戦争において常に退却していたのだ。けれど、国家のためには暗殺の決死隊に選ばれ、革命党の実行委員となる。国家のためであるとして、旅順港の封鎖作戦において決死隊に入ること争った日本国民は、経済的君主らの暴力から逃げ、国家のために実行委員を辞退する国民ではない。誤解してはいけない。我々は爆弾を使っても何の解決にもならないということを知っている。時に聞く爆発音は、大潮流の前に岩石があるため、それにぶつかって出るしぶきの音にすぎない。けれど、爆弾が国家にどんな害悪をもたらすのかという問題とかかわりなく、爆弾テロ<sup>15</sup>そのことは事実として常に見られる現象である。この爆弾テロの理由を最も明らかに説明したものは、現在ロシアで起こりつつある革命戦争の大砲を撃っているイゴール・サゾノフ<sup>16</sup>の言葉である。彼はブレヴェを暗殺した<sup>17</sup>爆弾の使用人として自身を語って言う。

「ロシア政府は我々に対し、言論の自由を禁止した。言論がなければ、我々は意志を通じることができないと思っているのだろうか。人類は言論がなくても意志を通じさせることができる精神を持っている。

我が社会革命党は、武器を選択することについて決して臆病ではない。政府が剣によってかかってくるならば、我々は剣で対抗するだけである。大罪悪を犯したブレヴェを殺したのは、罪人は刑を免れることができないということをロシアの官吏に示したにすぎない。我が党は予備役であろうとも、これを行うためには断然現役に服し、私はその任務を遂行することを光榮としているのだ。

私の受けた服従の遂行によって革命は始まり、政府は初めて噴火する山の上で踊りを踊っていたことを知ったのだ。実は、政府は四十年前に直ることのない傷を受けていたと言える<sup>18</sup>。けれど、未だ倒れていないのは、専制というアルコール中毒に陥っていて、わずかに気を張っているにすぎない。どうしてこれを正常な生活と言えようか。

当時は農奴解放によって幕を閉じたように見えるが、これは皮相的な見方である。農奴解放は人々に対し、明らかに自由と独立を意識させるようになった。アレクサンドル二世の改革はロシア革命のアルファであり、それ以来ロシア国民は懸命に努力してきた。そうであるならば、革命のオメガは今日にあると言える<sup>19</sup>。要するに、今日の問題は誰が革命の

---

<sup>15</sup> 原文では「爆裂弾其事」となっているが、意味をわかりやすくするため、言葉を補った。

<sup>16</sup> サゾノフ(Egor Sazonov)は、イゴール・セルゲイヴィッチ・サゾノフと言い、ロシアの社会革命党に属した革命家。同党内の急進派(「人民の意志」派)に属し、ブレヴェ(Plehve)を暗殺した。

ブレヴェは、ヴィヤチエスラフ・フォン・ブレヴェと言い、帝政ロシアで内務大臣を務め、一八七〇—一八〇年代の革命運動を弾圧した。

<sup>17</sup> 「(一九〇三年) アゼフ、サヴィンコフ等はジュネーヴでブレヴェの暗殺を計画し、デュレボフとマツェイエフスキーは辻馬車の駈者、カリヤネフは行商人に変装してブレヴェの動静を探り、ドーラ・ブリリアント女史は爆弾の保管と装填に任じた。待つこと約一年、機会をついに到来した。四年七月一五日の午前十時、秘密警察の私服警官に護衛されたブレヴェの馬車が、首都のイズマイロフスキー通りにさしかかった刹那、エゴール・セルゲイヴィッチ・サゾノフの投じた十二ポンド爆弾は、この権威赫赫たる専制政治の権化を屠り去った。」(荒畑寒村『ロシア革命運動の曙』〔岩波新書・一九六〇〕一四六頁)。

<sup>18</sup> おそらく農奴解放令の発布を指すと思われる。

<sup>19</sup> 「アルファ」はギリシャ語の第一母音、「オメガ」はギリシャ語の最終母音のことで、「最初」と「最後」を意味する。なお、新約聖書「ヨハネによる黙示録」の一節に、「わたしはアルファであり、オメガである。」(第二十一章六節・第



遂行者となるかということにある。私は、爆弾を使えば革命を遂行できると思うほど愚かな人間ではない。一つの爆弾の背後には数万の国民が立っていることを忘れてはいけない。私などはこれを感じて泣いている。我らは国民を煽動するに及ばない。国民は既に独立して考える知を持っているのだ。現在の制度は二、三の爆弾を合図として、国民の苦しみによって倒されるだろう。国民の苦しみと不平は、現在の制度が維持されるうちは静まるものではない。私はこの目的を遂行するために三年を費やした。そしてそのうちの一年半は牢獄で過ごした。このように熟慮して行った天誅は、決して報酬がないままで終わらないだろう。私がシベリアにいた時、何度ウラジミール大公<sup>20</sup>とブレヴェを一挙に倒してしまうことを夢見たことか。私のような者を戦士にしているのは、政府の罪悪でなければ何であろうか。私がブレヴェを倒したことを見た時、私は自分の良心の命令に従ったことを喜んだ<sup>21</sup>。」と。

我々はこうした現象を単なる学理の材料として冷静に見過ごすことができない。これは我々自身とともに、言論の上に迫害を加える非立憲的な者が戦慄すべきものではないか。日本国民の性格はフランス人もしくはイタリア人に比較されているように、ひどく忍耐が欠けていることを覆いがたい事実とする国民である。かつて貴族階級を打倒する時には政治狂の彦九郎を出し、民主的運動の時には大阪で天皇の写真を踏みつけた門田<sup>22</sup>という者を出した。自他の生命を甚だ重んじず、最も殺人犯の多いイタリア人よりもはるかに凌ぐ統計を示している国民なのだ。理由もないのにたちまち怒って、「べらんめえ」と叫ぶ多くの労働者を見よ。—この「べらんめえ」という一言！ 今の労働者が自分の状態がどんな理由によるのかを理解し、そして迫害される時、「べらんめえ」という一喝とともに振り上げる鉄拳の中には、まさしくサゾノフが使用した薬品が握られるだろう。—この時が来たらどうするのか。我々はイゴール・サゾノフの言葉を読み、今の権力階級が暗殺の教唆犯に敢えてなっていることを見て震えている。

まさに、言論を迫害するといった野蛮な風習は、文明国を標榜するからには、今後二度となされてはいけないことなのだ。しかしながら、ただ奇怪なことは、迫害者が社会主義を禁圧しながら、逆に教育の普及を図っていることである。もし徳川家康が教育を奨励したこと<sup>23</sup>が貴族国に対する革命を早めたことを忘れないならば、全国民が与えられた教育によって、サゾノフの言った「既に独立して考える知」を持つようになった時、経済的貴族階級を一掃する経済的維新革命が到来することに気づかないというのは、何という矛盾と言えようか。この点で迫害が貫徹しているのは、まさしくロシア政府であろう。あの国に

---

二十二章十三節) という表現がある。

<sup>20</sup> ウラジミール大公というと、中世にあったキエフ公国の君主(キエフ大公)のことを指すのが通常であるが、キエフ公国は最初のロシア国家とされるので、ここではロシア皇帝を指すと考えられる。

<sup>21</sup> ただ、実際には罪の意識が現れ、決して消えることがなかったという。

<sup>22</sup> 自由民権運動期に、大阪で雑誌を立ち上げた人物の中に、「門田三郎兵衛」という者がおり、おそらくこの人物のことであろう。

<sup>23</sup> 江戸幕府の体制下では、階層秩序を維持するために朱子学を用いていたが、朱子学の格物致知の思想は少なからず批判精神を育て上げるため、討幕運動の原動力になったと言われる。

においては、政府の命令によって大学教授の学説を決定し、各国の国法の比較研究を禁止していた。これは、穂積博士の憲法学が伊藤博文氏の『憲法義解』の主旨に必ずしも賛同せず、独立して講義していることの比ではないのだ。大学の生徒が自由主義の傾向を帯びた書籍を持てば、そのことによって退学させられる。これは、ミューイアヘッド<sup>24</sup>の倫理学に狼狽し、喜劇の限りを尽くしたことよりもはるかに周到な注意を払っている。世界の歴史を講義する時、ギリシャ・ローマの共和政治とルターの宗教改革とフランス大革命を教えることを禁じ、意味のなくなった残りの部分だけを許容している。これは、建武政権の失敗を無礼千万にも後醍醐天皇の溺愛<sup>25</sup>だけに負わせ、頼朝、家康などについて人民を愛し、慈しんで育てた者だと賞賛する歴史哲学者に教育勅語を講義させるという不謹慎な国では、及ばないものである。啓蒙運動は全ての革命の前に先だって<sup>26</sup>革命の根底となる。社会民主主義はその実現を国民の覚醒に待つ。国民が次第に長い夜の眠りから目覚め、社会民主主義の真価を独立して判断しようとしている、もしくは判断しようと待ち構えつつあることは、まさに今日までの教育のおかげであるから、それに感謝しなければならないのだ。高天原でも、日出づる国でも、尋ねる余地はない。有賀博士の反逆委任論でも、穂積博士の義時主権論でも、顧みる必要はない。知識を伝達する文字をほとんど全国民にまで普及させたということは——ロシアの革命はこの点で困難さを持っているのに反し、日本国民の全ては社会民主主義に入る鍵を手握っているではないか——、全国民によって権力階級が包囲されたということである。たとえ開墾された畑にしばらく雑草が生い茂ろうとも、社会主義が真理ならば一粒が一万倍になって花をつけ、実をつけるだろう（我々がこれまで社会民主主義を非難する多くの学者を打破してきたことと対照し、どちらが真理であるかを見よ）。あらゆるものは生存競争をしている。真理の生存競争に打ち勝って社会民主主義が全国民の頭脳を占領した時、国家の意志は新たな社会的勢力を表白し、経済的維新革命が法律戦争によって成し遂げられるのだ。

#### 15-4 啓蒙運動の意義

だから、社会民主主義の運動は純粋な啓蒙運動であると言える。したがって、マルクスとプルドン<sup>27</sup>が分離して以来、暴力に訴える者に対して最初に立って退ける者は社会民主主義である。もちろん、法律戦争を戦うための法律的形式がない時代及び国家においては、サゾノフが言ったように、「剣に対するに剣」によって戦うことは唯一の方法であり、法理学上も正当である。ロシアなどは、皇帝の行動が法律によって規定されていないため、適法行為であると言えないように、人民の行動も従うように規定された法律を持たないため、

---

<sup>24</sup> John Henry Muirhead のこと。

<sup>25</sup> ここで「溺愛」が何を意味するかが不明確である。武家を軽んじて、公家を重用するという不公平な人材登用のことを指すとも、阿野廉子を寵愛したことを指すとも解釈し得る。「溺愛」という語を用いていること、「人民を愛する」という語の対比から考えると、後者の趣旨ではないかと考えられる。

<sup>26</sup> 原文では「先きて」となっていて、[ママ]と注記されている。「先だちて」の誤りであろう。

<sup>27</sup> プルドンはフランスの社会主義者で、無政府主義の創始者の一人。

適法行為と言えるものがない。国民と皇帝の関係は初めから法律関係ではなく、道徳関係かあるいは強力関係である。つまり、奴隷道徳によってあらゆることに服従するか、そうでなければ強大な力に訴えて拒絶する関係である。だから、皇帝を公然と殺すことを死刑と言って不当でないならば、革命党が皇帝の暗殺を死刑に処したものと名付けることも正当なのである。近代国家における死刑は、国家の目的に背く者に対する国家による殺戮であり、その方法が公然としたものであろうと、密かなものであろうと区別されるべきものではない。ロシア皇帝が個人的利益に反する国民を罪人と名付けるならば、国民が国民の利益に反すると認めるロシア皇帝を罪人と呼ぶことも自由である。罪人とは、国家の利益を害するという理由で国家から命名されるものであり、皇帝か国民という名称の違いがその理由となるのではない。ロシア皇帝という者が発する言語を見よ。彼は、「朕の臣民」、「朕の国家」などと言う。もし農奴解放以前のように、土地及び人民が多くの家長君主ら（つまり皇帝及び貴族ら）の所有に属する財産ならば、財産権の主体としての権利に基づくのであるから、こうした主張は不当ではない。しかしながら、現代のロシアは一人の人間が最高機関を組織する君主政体であるが、皇帝が国家の外に立って国家を自己の利益のために手段として取り扱う家長国ではない。ところが、彼はどんな自由を与えられた最高機関であっても、君主として行動する時、法律上の効力を持たせるには国家の部分として国家の意志（つまり、自己それ自身の利己心によって行う行為ではない）を表白しなければならず、そうしなければ言行は何の効力もないことを忘れていたのだ。だから、ロシア皇帝が国家機関として国家の意志を表白するものであるならば、それに反することはいかなることも法理上犯罪であることは言うまでもなく、彼による殺戮は国家の刑罰によって死刑と名付けられるだろう。けれど、彼は人民と土地を朕の利益のために好きなように処分できる、朕の所有財産のように考えている。そのため、国民は初めから法理上の正当防衛に立つことになるのだ。そうすると、強大な力による決定である。刑罰がなく、犯罪がなく、反逆がなく、ただ絞首台とダイナマイトがあるだけである。

我々は断言しよう——ロシア革命党がやむを得ない正当防衛によって国家機関という破壊者に対して殺戮を行っていることは、政治上の利益からはどのように評価されようとも、少なくとも法律に背くことでないことだけは確実であると（「暗殺は違法であるが、国家の利益のためには許される」というのは必ずしも全てに当てはまることではないが）。もちろん、ロシアといえども法律の形式を備えたものは存在するだろう。けれど、それは皇帝が国家の部分として意思表示をしたものではなく、個人的利己心を満足させるため、他の国家の部分を犠牲として取り扱おうとする無効な法律である。それどころか、法律でもない。君主専制政体の多くが家長国と差別しがたいという事実があるのはこのためである。唯一の国家の最高機関が法律的規定によらず、単に政治道徳として皇帝の良心だけに依存して維持されているので、低級な良心の持ち主はしばしば個人的利己心によって自ら国家機関を破壊し、国家を略奪し、金の冠をかぶった反逆者となる。もしロシア皇帝がたとえ法律的拘束がなくても、国家の利益を中心に考えて——、あたかも儒学の政治道徳を持ち、唯一

の国家機関として一步も乱れた行動をしなかった維新以後二十三年までの日本の天皇のように——行動するならば、一つ一つの言行であっても、国家主権の発動となるから、これに背くことは国家に対する違法な振る舞いである。ところが、あの国においてはどうか。皇帝は国家の略奪者であって、国家機関ではない。国家に対する反逆者であり、国家の主権を行使する君主ではない。——「朕の臣民」、「朕の国家」と放言する彼は、まさしく国家の略奪者であって、国家に対する反逆者である。略奪者を駆逐しようとしている革命党ももちろん国家機関ではないから、皇帝の暗殺を死刑に処す行為と宣言していることは法律意味のないものだが、国家の反逆者である皇帝が築いた絞首台は、その爆弾以上に法律的効力があるものではない。反逆とは主権者に反することである。だから、皇帝が国土、人民を財産と考え、全ての者を犠牲として取り扱っていた家長国においては、皇帝が主権の本体であったから、反逆に対しては皇帝の名において刑罰が科された。公民国家の現代において主権の本体となるものは、生存進化の目的を持つ国家である。その目的を無視する行為と意志があれば、ロシア皇帝であっても、一個の謀反人にすぎないことは法理学の原理からも動かしがたいものであると言える。だから、反逆者に対する自己防衛は法律上正当であり、国家は自己の目的を表白する道を失ったものとして、機関が新たに設定される時を待つ他ない（穂積博士の怨霊は言うだろう。「国家が動揺する時は主権の所在が不明な時である。」と。氏もまた我々と等しく現在のロシアが動揺期にあつて、皇帝が主権者ではないことを主張する者なのだろう）。

### 15-5 なぜ上層階級は社会主義を迫害するのか

この法理学の原理から見れば、サゾノフの言葉は現代のロシアにおいて明らかに真理である。我々はこの理由から、今の迫害者が国家機関としての地位を逸脱し、一介の乱暴な下僕<sup>28</sup>となりつつあること恐れるのだ。今日までの日本政府は、しばしばこのような様相を呈している！ 内閣総理大臣が議員を死刑に処せと命令する時、彼は我々の服従すべき国家機関であろうか。巡査が勅令を出して交番の前に帝国議회를招集しようとする時、彼は我々の服従すべき国家機関であろうか。国家機関は与えられた権限内においてだけ国家機関なのである。従来政府というものが社会党に対する時、与えられた権限を逸脱して、暴力によってこれにあたるということは、まさに国家機関の破壊者である乱暴な下僕の振る舞いである。社会民主主義者は権利侵害に対し、あらゆる手段をとることができるのだ。

ただ、今の社会党がこれを見過ごして防衛権を振るわないのは、権利を尊重しないからではなく、血を流すことの多くは利益にならないという利害論に基づくからであると考えられる（天下は彼らが屈辱に耐えていることを讚美せよ。何者の前にも良心を服従させない彼らは、主張が広められるという利益のために警官らの泥にまみれた靴によってあらゆる権利を踏みにじられているのだ）。だから、利害論を軽視する無政府主義者から社会民主

---

<sup>28</sup> 原文では「暴徒」となっていて、〔僕力〕と注記されている。訳文ではわからなくなっているが、後には「暴僕」という語が出てくるので、「暴僕」の誤りと見て訳した。

主義に加えられる嘲笑、罵りは全てこの点に集まる。彼ら無政府主義者は言う。「社会主義者は合法的方法によるべきだと言うが、従うべき法律そのものが従うべき権利によって作られたものではないのだから、その法律に従って罪悪に満ちた議会に入ろうとも、何ら効力のある法律を作ることができない。社会主義者は議会的ユートピアに依拠しているのだ。」と。しかしながら、こうした推理的な議論に答えられないとしても、社会民主主義者にとっては決して恥辱とはならない。現実理想への階段<sup>29</sup>であって、現実の社会国家に足を立てずに理想へ到達することは断じて不可能だからである。社会民主主義の法律戦争が現実の不合理な法律を出発点にするからといって、その効果を否定されるならば、天下のどこに合理的なものが存在するだろうか。無政府主義者といえども、あらゆるものを否定することが合理的だと言わないだろう。それならば、度々使用されるダイナマイトも不合理だとしてどうして否定されないのか。

ただ、社会は進化する。進化は階級闘争による。社会が今日まで進化し、そして階級闘争の優劣を投票という方法で表明するようになった。投票は最もよく社会的勢力を表白する革命の道であって、爆弾よりも、ストライキよりも最も健全で確実に理想への階段を上っていく大通りである。これがない国家においては、他の小道として反乱と爆弾テロの道が開かれる。この反乱と爆弾テロという道を通り過ぎて法律戦争という大通りに入ったものは、今文明国と称される多くの国であり、未だ小道を歩いているのはまさしくロシア国民である。我々がロシアに生まれたと仮定せよ。我々は社会民主主義者の口、舌を嘲笑し、爆弾テロの主張者となろう！ ああ、己の腕から地に投げられた爆発の硝煙の中で、ツァーリとともに倒れるニヒリストよ！ 天国の扉は僧侶の手で叩かれて開けよう。革命の舞台は血で染められた花道を通して、達せられることがある。維新の民主主義者はこのために血塗られた刃を懐に潜ませていた。ただ、今日の我々は一歩の幸運にめぐり合い、立法という方法をとる程度まで進化した現在の日本国に置かれたため、たとえ暴漢がいかにか国家機関である権限を逸脱しようとも、我々は決してこれに対して正当防衛権を主張せよと奨励することがない。社会民主主義者は、その名の示すように、個人の権威よりも社会の利益を尊重することを甘受すべき場合が多いとわかるだろう（我々は、重ねて今の日本社会党が穩健的であることを讃美する）。

#### 15-6 普通選挙の要求の趣旨

普通選挙権の要求は、この法律戦争のためになされるのである。

まさに、維新革命の理想を実現しようとする経済的維新革命は、普通選挙権があればほとんど実現できる。国家が主権の本体でなかった時の革命は、常に反逆者の名を負って血と鉄によって展開された。国家の内容に関わる革命は、国家主権の名の下でひとえに投票によって展開する。——「投票」は経済的維新革命の弾丸であり、普通選挙権の獲得は弾薬

---

<sup>29</sup> 原文では「理想の階級」となっているが、明らかに文脈にそぐわない。後の段落に、「理想の階上」という表現があるので、「理想の階上」の誤りであろう。

庫の占領である。法律戦争以前の革命は、常に血という油によって回転を滑らかにしていた。投票という弾丸による革命は、拍手喝采によって舞台を開く。だから、革命の定義の中で流血を不可欠の要素として加えることなどは、とるに足らない見解であることは言うまでもない。もし流血そのことを革命であると言うならば、皇室内の闘争も無数の革命であるということになり、戦国時代の戦、討伐などは数百、数千の革命が起こっては収まったものだとしなければならない。革命とは思想の組織を完全に違うものにするということであり、流血があるか否かということは問題外である。したがって、いかに多くの血を注ぎ、死体を積み上げようとも、同じ思想の組織が継承されるならば、それは戦乱と称されるものであって、革命ではない。例えば、壬申の乱<sup>30</sup>を革命とは言わず、大化の立法を革命と言い、源平の戦を革命と言わず、頼朝による鎌倉幕府の成立を革命と言い、大坂の陣を革命と言わず、戊辰戦争を革命と言うのは、君主国、貴族国、民主国とそれぞれに思想の組織を異にするからである。——社会民主主義の革命と言うのは、今の少数階級による私有財産制度（個人主義が理想とした社会の全部分による私有財産制度ではない）を根本から一掃し、個人が社会の部分として部分の集合体である社会を財産権の主体にするという共産制度の世界にしようとして、別の思想の組織に変更することにあるからである。だから革命とは、旧社会が死んで新社会が産まれることである。

もちろん、母と子の上に大きな遺伝があるように、新社会が全て旧社会の遺伝を受けて発展するものであることは言うまでもない。ただ、「難産で生死の境をさまよいながら出てこなければ、産まれた者は新生児ではない」と言うような知能を喪失した世に生きていないように<sup>31</sup>、社会生理学の原理によって発見された投票という産婦人科医は安産で新社会を誕生させるようになっただけである。ただ、どうしようもないことは、旧社会の野蛮で子供を愛することを知らない悪い母親は、自己の腹に宿している胎児を墮胎させようとし、産まれようとする赤子を圧殺しようとする。悪い女は無知で野蛮なため、常に選挙権という産婦人科医の手助けを拒絶し、自分一人が転倒し、痛ましい流血に苦しんでいる。しかしながら、一度宿った子供は産まれなければならない。また、もしこれを墮胎、圧殺しようとも、母体自身が丈夫なうちは再び宿る（だから、衰亡する国に革命の風潮はない）。歴史的経験を持った社会は、いかに無知であっても、流血が母体そのものを苦しめることを知っている。また、愛の進化は新社会が自己に代わる第二の自己として生存するものであることを教え、さらに産婦人科医の力が驚くほど出産を容易にするという事実も教えている。だから、彼女<sup>32</sup>が胎児とともに自己そのものを滅ぼす可能性がないことを知っている以上、また彼女<sup>33</sup>自身の外部的圧迫もしくは内部的不調によって衰弱し、妊娠に耐えられな

---

<sup>30</sup> 原文では「壬辰の乱」となっているが、壬申の乱の表記するのが正しい。壬申の乱は天智天皇の死後、息子の大友皇子と天智天皇の弟である大海人皇子（後の天武天皇）が戦った戦。

<sup>31</sup> 原文では、「只、難産にて生死の間に入らせざれば生れたるものが新生児にあらずと云ふ痴呆の世に存せざる如く」となっているが、文意をつかみやすくするため、意訳した。

<sup>32</sup> 原文では、「彼」となっているが、「それ」の意味で訳すか、「彼女」に修正しないと、文脈に適合しない。次の文では「彼女」という語を用いており、ここも「彼女」に修正するのが適切と言えるので、「彼女」に修正して訳した。

<sup>33</sup> 前注と同じ。

い状態にはなっていない以上、普通選挙権の猛烈な要求は厳しく拒絶できないのだ。彼女は既に胎児の重さに耐えられなくなっている。——この胎児はどうして宿ったのか。言うまでもなく母体が成熟したことによって、発育した社会性という卵が社会民主主義を受精したからである。胎児は実現されるべき理想として完全に作られた。胎児は母体の中で動き回る。ほとんど産声が聞こえている。腹を破ろうとしている。ただ、産婦人科医が来るのを待っているだけである。——普通選挙権はこのようにして要求されていると言える。

だから、社会民主主義が要求する普通選挙運動は決して虚名のためではない。今のアメリカ合衆国のように、むやみに黄金皇帝らの御考えに従って、奴隷として発言するための一票ではどれほどの価値もない<sup>34</sup>。一票の投票は封建の城郭を打破した大砲の轟音である。現代の日本のように、紙幣と交換する汚らしい手で投票に触れるのではない。一片の投票用紙を箱に投げ入れることにより、その両手からはまさしく鮮血がしたたっているのだ。この覚悟で要求する普通選挙権運動の前に誰が抵抗できようか。——全ての者はただ蹴り破られるだろう。我々は、一人で身を挺して城門を爆破している大胆で華麗な愛国者のように、とどろく爆発音が日本国内に起こることを期待するものではない。しかしながら、団結があらゆる力になることを信じて、進退一つに規則を重んじた満州の忠実で真面目な労働者が帰って来る時！ ——今、彼らは続々と帰ってきている。人は彼らの凱旋を迎えるが、彼らは（単なる）凱旋者ではなく、法律戦争を戦うための進撃軍なのだ。ロシアの彼らは敗者ではなく、帝王の冠をかぶった反逆者を打倒するために進撃しているのではないか（私は書斎の窓を開くと聞こえる歓迎の万歳が、まさに王者の軍を迎える桀、紂が支配していた地域に住む人民の声のようであることに思い至り、雨のような涙を流す時がある）。団結は勢力である。社会的勢力は主権を持つものである。この団結的権力の前に、なお無謀にも納税額の量を見て<sup>35</sup>軽蔑の目で眺められるだろうか。もし納税額がわずかであることが選挙権を拒絶する理由となるならば、血税について無能力な者が重大な政権を持っているということはどんな理由によって説明するのか。愛国者よ！ 君たちが担架に横たわって夢見心地に陣の後ろへ運ばれていた時、帯のように包帯から漏れて垂れていた鮮血は、むやみに冬枯れした草を肥やすにすぎず、権利の一粒さえも実らせなかった。月が明るくなり始めた夕暮れ、雨の降る暗闇の中で、君たちがふるさとの愛する妻と子を思いやりながら、前線部隊に立っていた時、国家の大臣は赤十字社の名で売春婦をあさって悠然と天下をまわっていた。万骨が残るだけの小さな墓標の前で、君たちが野花をたむけて別れの涙を勇ましい手で拭っていた時、七博士<sup>36</sup>という者たち（賤ヶ岳の七本槍<sup>37</sup>でもあるまいというの

<sup>34</sup> 原文では「幾何の市価にあらず」となっているが、これを文字通り訳すと意味が通じにくいので、意訳してある。

<sup>35</sup> 原文では「搜で」となっていて、「ママ」と注記されている。『北一輝思想集成』は、「挿んで」と読み、「かさにきて」の意味と解している。漢字から見ると、『集成』のとおりと思われるが、文章全体のニュアンスから考えると、「かさにきる」という表現は微妙であるため、訳では別の表現を用いた。

<sup>36</sup> 日露戦争の開戦前には、東京帝国大学法学部の七人の教授（戸水寛人、富井政章、金井延、寺尾亨、高橋作衛、小野塚喜平次、中村進午の七名。）が主戦論の意見書を提出した（一九〇三年六月）。この七博士は、講和条約交渉時に条約案に反対したため、政府は、筆頭の戸水を休職処分処した。

<sup>37</sup> 賤ヶ岳の戦いで秀吉の下で活躍した武将。加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟屋武則、片桐且元の七人。

に!)は、硬直した誉れにつかって得意になり、君たちの同胞は一売春婦お鯉がいる遊郭の門前を警戒していたことを知らないのか。戦友の亡骸が埠頭に歩み出て、君たちの船の煙が東に消えていく様<sup>38</sup>を見送りつつ、そのくぼんだ<sup>39</sup>目にためていた涙は、ただふるさとの子供の泣き声<sup>40</sup>から出たものにすぎなかったのか。無権利の奴隷となって子供の戯れのよな金片<sup>41</sup>を胸に飾るよりは、ただ立派な鬼となって満州の野に迷え。

—我が愛国者よ、答えよ！ 君たちは国家の部分として国家の他の部分が生存し、進化するために喜んで犠牲になった。この君たちの犠牲は、他に国家競争がない時においても、上層階級のみだらな享楽、遊びのために奴隷として死ぬといった永続的で、絶えることのないものなのか。「国家のため」とは国家の上層階級のためだけではなく、等しく国家の部分である君たちの妻子のためという意味も含まないのか。ロシアの侵害に対して、国家のある部分が脅かされることは事実である。しかしながら、等しく国家の部分である君たちの階級が、国家の上層階級から常に絶えることのない虐殺を受けていることは、「国家のために」処理する道がないと言うのか。「四千万の同胞よ、国家のためだ。」と叫ばれた時、その四千万の同胞は国家だということであり、二、三もしくは少数階級だけを国家の全部であると考えたのではない。それなのに、国家のためにした行為は完全に上層階級の部分だけにとどまって—未亡人、孤児、そして野にあふれる餓死した人がいるだけである！ 彼らは国家の部分ではなく、牛馬の一部か！ 今日国家の部分である一人の人間が国家の全部を占める君主国ではない。少数部分である階級が国家の全部を占める貴族国でもない。民主国とは、国家の全部分が国家であるから、愛国の名において全ての同胞に犠牲となることを呼びかけるのである。そして全ての犠牲となる義務は、全てが目的となる権利を意味する。—「国家のため」とは国家対国家の場合だけではなく、国家の大部分を虐殺している今の経済的貴族を打倒する時にも要求されるべき厳かな叫び声なのだ。資本家政府と地主議会による共犯を挙国一致と言い、盗品を分配する際に起こる喧嘩を官民の衝突と称している今日において、「国家」の声に目を覚ました国民が、満州の野から血で染まった服を着て進撃して来る時、そして進撃軍を歓迎し、その戦列に人々が加わるために用意している時、それでもなお普通選挙権尚早論を唱えられるだろうか。外敵の城門は突撃によって破壊し、議会という魔物の屋敷は普通選挙権によって堂々と攻め入ることができよう。ああ、国会尚早論で髪の毛を逆立てた彼らは、今や体を翻して普通選挙権尚早論を唱えている。このようなことから、あの政友会というものも、進歩党というものも、完全にかつての民主党としての精気がなく、経済的貴族主義の良心によって藩閥と上院貴族らを奉じて奴隷となっている。我々は断言しよう。普通選挙権の獲得は断続的な数百、数千人の請願によって得られるものであってはいけない。まさに、根本的啓蒙運動による全国民

---

38 旅順等での激戦で命を落とした兵士たちの亡霊が、生き残った兵士たちの帰還を見送るという叙情的な光景を指すと思われる。

39 原文では「窪き」となっていて、[ママ]と注記されている。「窪んだ」とすべきなのだろう。

40 原文では「音づれ」となっているが、意味がわからない。そのため、訳文は意識したものである。

41 当時、戦功のあった者には金鵄勲章が与えられた。



の覚醒によって、彼ら権力者の一団を威圧して服従させることによって得られるのだと。全ての権利は強大な力によって決定される。団結に目覚める時、強大な力が生まれる。子供の数がいかに多くても、ゼロを数千倍しても依然としてゼロであることと同じである。それと同様に、国家の下層階級が団結を強力なものであると悟らないうちは、権利を要求する基礎に強大な力はない。我々はこの点においてインターナショナルの大会の決議に反し、日露戦争の効果を自然法則の名において讃美する。国民は団結した。団結が強大な力であることは明らかに意識された。そして煙の中で翻った「愛国」の旗は、今や法律戦争の進撃軍の陣頭に高く掲げられた。彼らは後方で声を上げる群衆としてとどまることを快いものと考えず、奮い立って突撃の第一列に起っている。——そしてこの心は投票戦争においても同じで、選挙権もなく声を上げるだけの群衆であることができず、自ら戦闘員になろうとするほどの覚醒している。フランス革命の色を帯びた旗がまず翻り、バステューユ城の弾薬庫を奪い、西南戦争の血気盛んな者たちも初めに弾薬庫を襲ったように、法律戦争においては投票という弾薬庫を占領する普通選挙権の獲得が宣戦布告よりも先に行われなければならない。笑う限りだ！ 今の政府と資本家は自分たちを滅ぼす進撃軍をむしろ万歳の声を挙げて迎えているのだから。彼らの突撃隊、決死隊、夜襲、総攻撃を賞賛し、(勝利を) 自らの手で獲得したと称している政府と資本家は、同じ彼らの突撃、決死隊の総攻撃によって一挙に打倒されるということを理解しないのか。頭を回してはるか後方を顧みよ。革命の火はまさに猛烈に燃え移ろうとしているのではないか。今日、日本の社会党を穏健的な二、三の「文筆家」、「キリスト教徒」どもと誤って理解するならば、これは斥候<sup>せつこう</sup>の姿を見つけながら、雲のような大軍がいることを忘れていたものである。この大軍とは目覚めた一般階級のことを言う。

### 15-7 第二の維新革命——普通選挙の実現による法律戦争

まさに、一般階級が普通選挙権を得て議会に戦士を送る時、階級闘争は煙の立ち上る原野ではなく、議院の壇上で戦われる。維新革命は一般階級の覚醒によって煙の立ち上った階級闘争を行い、貴族の手から土地と政権を奪取した。それと同じく、経済的維新革命は投票という階級闘争によって黄金貴族の資本と土地を国家に吸収させ、事実上の政権独占を打破するだろう。社会民主主義の階級闘争は(既存の支配階級に) 取って代わろうとするだけの闘争ではない。違うのだ。全ての階級闘争は運動の本隊が下層階級にあるということであり、闘争の結果は模倣と同化によって下層階級が上層階級に進化し、上層階級が拡張されるということになる。つまり、下層階級がそれ自身の進化によって階級を一掃するということであり、上層階級の地位が転換されて下層階級となったり、もしくは社会の部分の中で進化した上層階級を下層階級に引き下げられたりする原始的平等への復古ではない(今の社会党のある者、もしくはトルストイズムなどは、このようなことを主張するから、決して社会民主主義ではない)。さらに言い換えれば、社会が進化の中で社会の部分

42 敵の状況、地形などを偵察するために送り込まれる兵士。

を区画し、次第に進化させてきた結果、社会の全部分がとうとう今日の上層階級——いや、もちろんこれ以上に進化するようになるということである。維新革命において法律上国民の全部が国家となり、国家が目的であると言う社会民主主義が理想として掲げられ、全ての家長君主らが一掃されて階級国家は消滅した。それと同じく、経済史の進行としてさらに生産利益が帰属する主体である経済的家長君主が国家に吸収され、国民全部が経済団体となり、経済団体が生産の目的となり、それによって国家の経済的内容面で社会民主主義を完全に実現させようということである。つまり、経済的君主主義を打破し、経済的国家主義を建設することがその目的なのだ。

——ああ、国家主義を厳粛なプラトンの意義において主張せよ。——そして経済的君主らの略奪から手段として取り扱われている国家主義を救い出せ。君主主義とは、国家の一部分である君主らの利益のために他の国家の部分が犠牲として生死を決められ、あらゆる利益と最終目標が君主らにあるという意味で名付けられたものである。これは維新革命によって法律の上から一掃されたものである。ところが、資本家と地主という者は、国家の一部分である他の労働者と小作人を自分たちの利益と目的の手段とし、彼らを好きなようにできる君主として経済界にいる。したがって、その経済的勢力が政治的勢力として現れ、国家主義は法文の外に追い出されて見えなくなりつつある。法律を見よ。大日本帝国は厳として生存進化の目的を持つ国家である。それなのに、社会党というものと全日本帝国の人民が、国家主義という仮装の下で経済的君主主義が潜伏していることに気づかないとは、何ということか！ 社会主義は社会主義であり、現在の地理的社会に基づいた国家よりも一段高いものを理想とするとは言うまでもない。——しかしながら、経済的君主主義に国家を略奪されても冷ややかな態度をとるほど非国家主義ではない。社会主義はこの国家を厳粛に承認し、さらにこの国家の連合により、理想的独立に発展しようとする大国家主義である。国家主義は社会主義の進化の一過程であり、経済的君主らはもちろん国家の反逆者である。社会党がどうして国賊であろうか。また、社会党にどうして国家を否定するという混乱があるのか。国家は倫理的制度であると言ったルター、あらゆる倫理的要求の満足为国家に求めた孟子。我々はインターナショナルの大会の決議に反し、彼らとともに国家を是認し、そしてそれを社会民主主義の名において行う。今日の法律を見よ。大日本帝国は厳として倫理的制度である。そしてあらゆる倫理的要求を満足させることを理想としている。ただ、この国家法の下で経済的貴族らが割拠して存在し、経済的貴族らの個人主義が国家主義を盗み取ることで倫理的輝きを汚しているのが、大日本帝国そのものが罪悪を塗られ、醜くなっている。おお、来るべき第二の維新革命よ。再び第二の貴族、諸侯に対して階級闘争を開始しなければならない。これは階級を超越した国家の法律的理想によってなされるのだ。あらゆることは階級闘争による。闘争に打ち勝った者の頭上に権利という金の冠が輝く。正義の女神<sup>43</sup>は秤とともに剣を持っている。法律が理想とする正義は、

---

<sup>43</sup> ジャスティスのことである。原文では「正義の神」だが、ジャスティスは女神とされているので、「正義の女神」にした。ジャスティスは目隠しをして両手に秤と剣を持っている。目隠しをしているのは、裁く者を目で見ることにより、

理想の前に横たわって腐っている制度を打破して得られる秤であることを、剣を持つことで示している。権利の決定は古代、中世を通じて完全に腕力によっていた。それと同じく、最初の訴訟法は原告と被告を法廷に召喚し、決闘させた。「予は予の力で天下を取った。王になろうと思えば王に、帝になろうと思えば帝になれる。」と言ったことは、秀吉だけの権利獲得の方法ではない。剣の重量に従って秤は傾き、正義の女神はその傾斜によって判決を下す。今日の法律というものは国家機関を組織し、国家の意志を表白するという資本家階級の決定した正義である。資本家政府と地主議会は、黄金という分銅によって資本家階級の好きなように秤を傾けている。剣が秤を決め、戦勝者が権利を作る。腕力戦争の勝者がかつて君主国を建て、貴族政治を築いたように、今日の経済的混戦の中において幸運な者は、戦勝者として全ての権利の源泉となっている。だから、我々は断言しよう——社会党が弱く、労働者が奴隷として甘んじているうちは、社会民主主義は法律上だけは罪悪でないが、実際の世界においては少しも権利によるものではなく、正義ではないと。ただ、勝者は必ずしも勝者でなく、敗者もまた永久に敗者というわけではない。平等観の発展と無数の百姓一揆によって、社会の下層階級が武士、農奴の奴隷階級から脱却し強大な力を得た。維新革命の剣によって貴族国を打倒し、それによって平等の権利で秤を保持している。それと同じく、社会民主主義の現行法の下で小作人と賃金労働者が剣の鋭い光に驚き、団結して強大な力を作る時、経済的貴族国は打倒され、経済的平等の上に正義の女神は現れる。民主党の志士が鮮血に染まりながら織り上げた憲法という敷物の上に黄金をまき散らし、賭博にふけている政府と議会よ！ その賭博場を囲い込む広大な階級が久しい眠りから目覚め、夜の暗闇の中で鳴り響く社会民主主義の警鐘に耳を傾けている状況を見よ。この大団結が立派な男のような歩みによってその敷物の上に進んでいった時、盗み取った黄金は決してトランプ<sup>44</sup>のようなおもちゃとは言えない。眠れる獅子は犬よりも愚かである。百万、千万の奴隷は一人の貴族に恐怖する。小作人と賃金労働者という奴隷が貴族のような権威に目を光らせ、百万、千万の強大な力を得るために手をつないで一団となる時、獅子はたてがみを振るって政界の一角に立ち上がるだろう。ハツカネズミが逃げるような様を見せるだろう、政府と議会というものは！

### 15-8 慈善活動の偽善

それなのに笑うべきであるのは、この鍬と鉄槌を持った百万、千万の貴族の前に無礼にもパンくずを投げ込み、百獣の王の耳にキツネのような甘い言葉をささやくがいることである。

---

偏見を持つことを避けるためである。ただ、北が言っているように、秤を確保するために剣を持っているのではない。正確には、秤で裁いた後、悪を除去するために剣を振るうのである。

<sup>44</sup> 原文では「トランプ」となっていて、[ママ]と注記されている。「玩弄物」という語が続くので、おそらく「トランプ」のことであろうと思う。カジノでもポーカーなどで賭け事をするので、賭博場にトランプがあっても不思議ではないだろう。

パンくず！これを讚美して慈善と称する。ああ、慈善という名の下でいかに人類の権威は侮辱されていることか。我々も、飢餓のせいで倒れようとする者に向かい、「恵みとして差し出された手を払いのけよ。」と言うほど迂遠で、愚かな者ではない。しかしながら、慈善家と名付けられた多くのマムシの類は、最もましな者でも自己の道徳的快樂のために貧困者を犠牲として取り扱っている。下等な者に至っては、夜に行われる舞踏会の余興以上のものとは考えていない。我々はたとえ拳銃をのどに当てようとも、略奪者の裏門から投げ入れられた残飯を飲み込めようか。このため、面目を重んじる者が貧困に陥ると、救貧院に入ることに耐えられずに自殺する。

肉体が救われた者も、精神は殺された後である。慈善家という者の人生観は、完全にキリストを逆さにし、「人はパンだけによって生きる。」と考えられるものなのだ。慈善家のうちで最も憤って嘆く者は言うだろう。「労働者は尊ぶべき清貧の生活をする者であって、富豪などは座敷の上の乞食である。労働者の労働によって衣食を得ているのだから。」と。しかしながら、事実は決してそうではなく、彼らは乞食ではなく、堂々とした略奪者である。我々に不徳を暴露させて言わせよ。もし貧しい環境に産まれるならば、我々は地上の乞食であるか、座敷の上の乞食であるかを問わず、他人の愛にすぎるよりも、むしろ盗賊となって略奪をしよう。社会民主主義者は、君子と名付けられるミミズのような道徳家とは別物である。乞食は卑しめられ、略奪者は崇められる。ギリシャの詩人は海賊を高貴な事業として感嘆の対象とし、つい最近まで海賊のたくましがバイロン<sup>45</sup>の詩に入っていたほど尊崇の対象であった。中世の日本の武士は皆切り取り強盗を習慣とし、それは讚美の対象であった。乞食は歴史上讚美されたことがなく、金の冠は常に略奪者の頭上に乗せられていた。いかに資本家地主を座敷の上の乞食となぞらえ、自ら快樂を貪っていても、強者である彼らの前に蟻のように土下座し、略奪を讚美する者がなくなっていくのは、略奪された地上の乞食に対する軽蔑は永久に消えない。恵みの手を差し出す者の唇には傲慢な微笑があり、それを受ける者の首から屈辱の冷や汗がしたたっている。けれど、これがかつてのように個人の労働の結果であるものを涙の手で分け、他の不幸な個人とともに分け合って食べるものならば、我々はこの尊い人に対し、地に頭をつけて拝むだろう。

ところが実際には、蒸気と電気による社会的な労働の全てを上層階級の少数部分だけで略奪し、その略奪のせいで不幸な状況につながれた社会の大部分を、「慈善制度」の牢獄に押し込み、鉄の柵の間からパンくずを投げ入れているのだ。何という残酷なことか。——悪魔にも勝っている。野犬と講壇社会主義者は、「慈善」にだまされるだろう。人類は犬のように食を得れば満足するものではない。社会民主主義に目覚め、貴族のような個人の権威を得た労働者階級は、講壇社会主義者のように、道端の馬糞の側で土下座し、黄金大名を礼拝するほど恥知らずな良心を持たない。慈善と言う者の前に慈善という名で金銭を投げてみよ。烈火のように怒らないか。社会の全てが慈善を受けることを恥とするようになったのは、奴隷の卑屈さから脱却し、貴族の良心で心臓を染めたからである。全ては強力関

<sup>45</sup> イギリスの詩人。ロマン派の代表格。各国を放浪した後、ギリシャ独立戦争に加わった。

係である。力によって略奪した時代は力によって略奪され、今の法律によって略奪している者は新たな法律によって略奪されるだろう。強大な力こそが正義となる。黄金貴族が力を持っているうちは、今日の略奪は当然行われるのであり、我々は餓死した者の側に立つてもなお彼らの略奪を正義だと承認することになろう。百獣の王があらゆるものをひれ伏させ、その牙が血で染まった時、正義とは社会民主主義を意味するのだ。我々は涙を流して議論を補強しているのではない。鉄よりも冷たい権利論に訴え、社会民主主義を唱えているのである。パンくずの問題ではない。パンくずそのものの問題である。飢えている者にパンくずを与えよという道徳論ではない。パンに対する権利のために飢えることを顧みない厳かな権利問題である。武士は食わねど高楊枝<sup>46</sup>。全社会がこの貴族的権威を持たずに、どこに社会民主主義があろうか。

いや！ 権威に目覚めた彼らが今日の前にパンを投げられて侮辱されているように、彼らの飢えた時、宗教家という者は聖書を指して愚弄してきた。「イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食をした後、空腹を覚えられた。すると誘惑する者が来て、イエスに言った。『神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。』と。イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」<sup>47</sup>。ああ、キリストでもない彼らは、誰の導きによって道端で食べ物を求めて立っているのか。彼らは、まさに神の子であるのか否かを四十日四十夜の後に訪れた空腹によって、悪魔の前で試みられている者である。飢えた神の子が食べられない石をパンにせよと嘲笑されたように、神の子ではない彼らは一粒さえも生じない紙切れにつづられた文を目の前につき出され、「君たちが奇蹟を起こせるならば、この聖書をパンにせよ。」と愚弄されているのである。悪魔は十分その試みを尽したであろう。——それなのに、何事か！ 経済的進化のためにパンを得て、さらに神の権威を得ようと努力している彼らに対し、悪魔は再び愚弄を始めた。彼は言う。「君たちはかねてからよい生活をしてきたではないか。物質的幸福を求めてはいけない。」と。ミミズのような宗教論は、個人の権威について少しも理解していない。

### 15-9 資本と労働の調和という愚論

そしてまた、この厳かな権利問題を前にして、下劣な講壇社会主義者という者は資本と労働の調和と主張する。ああ、資本と労働の調和——どうして公武合体論に似ているのか！もし貴族、諸侯の土地が略奪されたものであることを日本の歴史から理解していないならば、そして資本が労働を略奪したものであることを『資本論』を読んで理解していないならば、公武合体論は今日にも存在しているだろう。資本と労働の調和は、地球とともに永遠に続く制度となるのだろう。今の講壇社会主義者が、穂積博士が統治権は天皇の皮膚に

---

<sup>46</sup> ことわざ。たとえものを食べていなくても楊枝を見せ、空腹であるそぶりを見せないこと。貧しくとも品位のある生活をするための例え。

<sup>47</sup> 新約聖書（「マタイによる福音書」）にある「荒野の誘惑」の一節（第四章一一四節）。訳にあたっては、日本聖書教会訳の聖書を参照した（以下同じ）。

附着したものであると主張するように、経済学において資本家は母体から出てくる時、へその緒に銀行券を貼り付けていると論じているならば、その議論は貫徹すべきである。ところが、実際には非常に吹き出したくなるのだが、講壇社会主義者は資本の発生は労働によることを認め、その資本からさらに他の資本が生じることを認める。それならば、資本は労働が具体的に表現されたものである——こうして、資本と労働の調和を言うようになる。こうした説明は「片手にはどんな音があるのか」<sup>48</sup>と問われた時に答えるものだろう（第一篇『社会主義の経済的正義』において、彼らが資本と資本家を混同していることを論じた所を見よ）。このようにして、彼らは資本と労働の調和という名の下で、資本家階級の利子、利潤と労働者の賃金が生産物を分配するものと論じている。先にも説いたように、旧派経済学の賃金基金説<sup>49</sup>が価値のない仮説であることは言うまでもなく、したがってその上に立っているラッサールの「賃金鉄則」が、修正もされずに唱えられるべきでないことも言うまでもない。農夫と牛が飼料の草を分配するというような文法が国定教科書<sup>50</sup>に採用されないうちは、分配とはこうした関係を言い表す文字ではない。資本と労働は命令と服従の関係にある。これは統治関係である。経済的貴族国の君主らが御機嫌と利害によって農奴と奴隷の上で好きなように振る舞う権利を持つ君臣関係である。維新革命党に向かって、貴族とその家老たちで構成される上級武士が禄米を多く得ることになるから、国体論を廃棄せよと言え、笑う限りであっただろう。今の講壇社会主義者は、経済的大名そのものを否認するために決起した労働者階級に向かい、「賃金の値上げ」というキツネ、タヌキのような甘い言葉を投げかければ、決起を鎮圧できると考えているのだ。労働者は空腹を訴えて鳴く犬ではない。社会民主主義は、労働者階級が単に貧困から脱却できればそれで満足するものではない。まさに、百獣の王が目覚めた怒りだと言えるのだ。

金井博士は『社会経済学』において言う。

「現在ドイツで最も強大さを極め、他のヨーロッパでも同情を表するものが多い社会民主党などは、とどのつまり政治上の革命思想と経済上の欠乏の間で昔からしばしば存在した連合が形を変えて発生したものにすぎない。この党が扇動する争乱に対する最もよい方法は社会の改良である。最近の経済学の研究、ドイツ帝国が一八七七年以来皇帝とビスマルクの力で多少実際に行ってきた社会政策は、つまりこれに他ならない<sup>51</sup>。この社会政策を行うにあたって、法令違反の行為又は争乱を扇動することなどを禁止し、もしこれを犯すものがいた時は厳罰に処すことは、最も必要な方法であることは言うまでもない<sup>52</sup>。これを言い換えるならば、一方で社会党に対する法令と執行は厳しくし、他方で彼らが生まれて

48 禅宗の公案（参禅者に示し、座禅工夫させるための課題。「ひょうたんでナマズを捕まえよ。」というものも有名な公案である。）の一つ。「両手を打てば音が出るが、それでは片手にどんな音があるのか。」という質問のこと。

49 イギリスの古典学派の学説で、J・S・ミルが唱えたもの。労働者の賃金にあてられる基金は一定であり、労働者の受け取る総額は固定されているとする説。

50 戦前は、教科書は国定のものを使っていた。明治中期には、国定の教科書は使われていなかったが、教科書の採用をめぐって汚職が起きており、国家主義的な教育を強めたいという国の意向もあって、国定教科書が使われるようになった。

51 ビスマルクのこの政策は「アメとムチ」として名高い。

52 日本においても普通選挙が成立した時、治安維持法が成立したことは記憶されるべきことだろう。

くる原因を調べ上げ、着々と社会の改良を施し、弊害を次第に一掃することが必要となる。

従来、社会民主党の政治上並びに道徳上の危険に対し、各国政府の採用した手段、方法の中には正当なものがある。失敗に陥ったものもあるが。……顧みると、この党の乱暴な振る舞いに対する強制手段と人民に教育を施すなどによるだけでは、決して禍を完全に一掃するのに十分ではないだろう。必ずやこれと同時に、下層の民の貧困を救い、貧富の差の程度を緩和させ、これに対する嫌悪感と言えるものを排除しなければならない<sup>53</sup>。……」と。

田島博士は『最近経済論』において言う。

「社会党は元々社会問題の解釈を目的として起こったものであるが、今や社会党それ自身が社会問題の目的物となっている。いかに社会党を処分するかは、まさしく社会政策上の難問の一つである。」と。

これらから、いかに馬鹿大名とその家老らが「民間人による勝手な議論をどうするか。」として空っぽな頭を叩いている様子がわかるであろう。

#### 15-10 社会主義の本義再論

いわゆる社会主義者の理想を持たない者よ。こうして根本思想を革命しようとする者と根本組織を維持しようとする者がどうして調和、提携できるだろうか。社会民主主義の名を汚すにすぎない盲動者の群れよ。賃金の値上げ、八時間労働、強制保険法——こうしたものが社会主義であると言うならば、我々はこうした理想のない盲動者から社会民主主義の名を剥奪し、公武合体論の中に駆け込ませなければならない。維新革命は納税の苦痛を訴え、竹槍やゴザで作った旗を掲げた百姓一揆<sup>54</sup>と決して同じではない。それと同じく、米価が高いことを訴え、賃金が低いことを叫んでストライキをするような工場一揆を断じて社会主義と同一視してはいけない。社会の進化は階級的層を順番に上層階級へ進化させていくことにある。だから維新革命は、君主として絶対的自由を持つまでに貴族階級が進化して各地に君主として君臨していた状態から、さらに全国民を武士、農奴階級から脱却させ、君主にまで進化した貴族階級に進ませて国民全部の自由・独立と個人の絶対的権威を実現して「民主」となった。それと同じく、経済的内容において維新革命によって実現された法律上の社会民主主義を完全に現実のものにしようとしている社会民主主義は、今の小作人と賃金労働者に今の経済的貴族もしくはそれ以上の経済的幸福、そしてそれに伴う全ての政治的、道徳的進化を得させようとする社会全体にわたる貴族主義である。だから（繰り返して言うように）、あの「平民主義」といった名は理想がない点で講壇社会主義者と大差がないものであり、むやみに工場一揆の頭となるにすぎない者の言行である。社会民主主義は社会全体の名において、つまり個人の全てを挙げて個人の権威の名において唱

<sup>53</sup> 原文の引用は「排除し……」となっていて、文章が結ばれていない。金井の文章がこの後も続いているためであろうが、それでは意味がわかりにくいので、訳文では文を結んだ。

<sup>54</sup> 一八七六年に、地租の軽減を求め、茨城、三重、愛知、岐阜、堺などで百姓一揆が頻発した。これを受けて、政府は翌年、地租を3%から2・5%に引き下げ、「竹槍でどんと突き刺す二分五厘」と評された。

えられなければならない。賃金の値上げ、八時間労働、強制保険法などによって貧困が除去されるならば、それは講壇社会主義者のいわゆる社会政策というものが成功し、「平民主義」の理想である下層的平等、清貧の平等が実現される時である。社会民主主義は「貧困」と「罪悪」よりも高尚な理想として、社会進化の宗教的理想の世界と個人の権威を当面の要求として掲げている。もし賃金の値上げ、八時間労働、強制保険法などによって社会民主主義の理想が少しでも満たされると言うならば——奇怪ではないか。それらを得たため、ドイツ社会民主党はさらに飛躍し、征服の翼は天に広がる雲のように全世界を覆っている。眠れる獅子は犬よりも哀れである。しかしながら、目覚めたライオンといえども、空腹では鉄の鎖を外すことができない。愚かさもここまで来ると歴史家が特筆すべきものである。——講壇社会主義者という者は、目覚めたが空腹のライオンに向かって一塊の肉を投げ与え、再び眠らせようと考えているのか。封建時代の百姓一揆はしばしば繰り返されてライオンは満腹となり、維新革命によって鉄の鎖を外した。日本社会党というライオンは、安い賃金、過度の長時間労働、病気や老衰の不安によって眠りから目覚めた力のない体を鉄の柵の中で横にしており、未だ起ち上がれない者なのである。

三百万の投票と八十二人の代議員によってドイツ皇帝を侮辱し、もてあそんでいる社会民主党よ！ これは、柵の外で恐怖心を抱く者から一塊の肉が投げ入れられたため、鉄の柵を噛んで激しく吠えているということではないのか。もちろん、ライオンは死ぬまで飢えさせることができない。ライオンは全てのもの引き裂いて食べる牙を持っている。しかしながら、飢えていては労働者といえども、ストライキを大胆に継続することができない。労働組合の大連合を作って軍事費を備えることは、いつも妻子も養えないほど安い賃金の労働者にできることではない。過度の長時間労働は理性のある生物から考える時間を奪い、社会民主主義を受け入れる能力を枯渇させる。日本のライオンが今日もなお飼い主である資本家と地主の前に柔順であるのは、ただ飢えのために力がないからである。

——ああ、ドイツ社会民主党の猛烈な勢いよ。満腹になることでライオンは権威を現し、多数党であることから当然の結果として占める副議長の椅子を、ドイツ皇帝という一人の男に敬礼しなければならないという不面目さを避けるために破れた靴のように捨て、一回の選挙ごとに等比数列の速さで投票と議員を増加させている事実を見よ（この点で、今の日本社会党の志士は肉の所在を指示している鋭い目を持っており、『日本社会党史』の第一ページに最大サイズの活字によって印刷される名誉を持っている）。日本の歴史が存在する限り、略奪者である大名、貴族の残骸さえも許容するものではないように、資本家による略奪の歴史が明示された『資本論』が焼かれない限り、いかに公武合体論によって譲歩しようとしても、譲歩はさらに次の譲歩を迫る。——いや、譲歩を待つまでもなく、法律戦争の剣の下で経済的貴族らが圧迫されない限り、決して「社会政策上の難問」は消え去らない。革命の前には常に調和、折衷といった人聞きのよい言葉を使った臆病で道理に暗い議論が見られる。馬鹿大名とその家老が、民間人による勝手な議論をどうするかと空っぽな



頭を叩いていたように——当時の民間人は元老<sup>55</sup>となつてはげ頭を叩いている——、この社会党をどうするかという問題がいかにかに法学博士、大学教授の尊厳を持つ講壇社会主義者にとって難問と称されようとも、革命はこうした合体論者を蹴散らして進む。一度宿った者は産まれなければならない。妊婦の腹に膏薬を貼っても苦痛は取り去られるものではない。

我々は断言する——社会民主主義の革命の前にいわゆる社会政策の譲歩があるのは、分娩の前に栄養物を送るようなものである。社会民主主義者は新生児の利益のために、また旧母体の安産のために強くこれを要求し、譲歩がない時には強大な力によって獲得するのだ。社会政策というものについて社会民主主義を刈り取るものと考えに至っては、胎児を墮胎させようとして盛んに牛乳スープを用いよと言う藪医者を行彿とさせる。金井博士と田島博士はあまりにも賢明であり、明治人名辞書の片隅にあることは極めて疑問であるが、このような議論はいかにかに私有財産制時代の頭脳<sup>56</sup>が興味のある形で組織されたかを示すものであり、彼らの大著は後世の歴史的研究者にとって博物館の珍品であろう（いや、彼らは通訳であるから、この名誉にあずかることができないかもしれない。だから、責任者は外にいるのだろう）。

だから、我々は階級的利益から超越して公言する。つまり、社会民主党に対する唯一の方法は、ビスマルクの敢行した鎮圧政策だけにあると。ロシアがしているように、宿った全て胎児を腕力で虐殺することにあると。ビスマルクの鎮圧政策がなければ、ドイツ皇帝は皇帝の座を十年前に追い落とされ、「カイゼル万歳」という忌まわしい声は今日のドイツでは聞かれないだろう。日本とほとんど同時に憲法を要求されたが、今なおツァーリは抑圧の戦端を開いて宮殿を守り、専制主義の母体が好き勝手な生活を続けているのだ。——どこにおいても権力者は博士らよりも悪であるが、大学教授を誇りとする者よりもはるかに賢いのだ。ロシアが革命運動を理解できないほどに国民を愚かな状態にとどめているのと同様に、今の政府はまさしく賢いことに、まず啓蒙運動の上に迫害を加え、言論の迫害を敢行しているのだ。そして見よ、さらに抑圧の足全体で公武合体論者のいわゆる社会政策を踏みにじっているではないか。——迫害もこのような有様であるならば、堂々として立派なものである。ビスマルクの社会政策は、講壇社会主義者が推測できるようなものではない。

歴史は我々に断言を命じる。ビスマルクの社会政策は強大な力によって圧政をした分だけ成功した。そして社会民主党の強大な力によって譲歩させられた分だけ失敗した。講壇社会主義者が彼の社会政策として示している強制保険法などは、まさに彼の手によるものではなく、また彼の本意によるものでもない。社会党の強大な力がある程度まで彼の手からそれを勝ち取り、凱歌を挙げたからである。ただ、彼はそうして打ち破られたにもかかわらず、なお鎮圧政策という金槌を振り回して社会民主党と戦った。——そしてこれもまた

<sup>55</sup> 元勳政治家のことで、首相候補者について天皇を補佐していた。もちろん、国家機関ではない。

<sup>56</sup> 原文では「頭痛」となっていて、〔脳力〕と注記されている。確かに、「頭脳」のことと見たほうがよいと思うので、修正した。

打ち落された。ルイ十六世が子供や烏合の衆に囲まれて断頭台に昇るに至ったのは、同情に厚い「小羊」だったからである。今のロシアを見よ。全領土にわき上がった大革命に包囲されながらも、あたかも大海の大波の中で孤島が立っているように、よく守っているではないか。ナポレオンはルイ十六世の城に突撃している群集を見て、ささやいた。「どうして一度も戦端を開いて群衆を追い散らさないのか。」と。最後には維持できないものであるとしても、権力階級にとって唯一の道は迫害以外になく、彼らの前にひざまずいて社会、国家の利害を説くことは彼らの権利を侮辱する者である。我々は科学的研究の名において断言する。迫害は強者の利益であり、権利であると。

### 15-11 社会主義の良心再論

つまりこの断言は、社会主義を迫害することはむしろ社会主義を盛んにするものだという社会党の主張が偽りであることを示すとともに、講壇社会主義者が公武合体論として主張しているいわゆる社会改良策が何の価値もないものだということを表しているのだ。社会改良策とは、上層階級の意志が社会全体の利益だと考えることを強制するものである。我々は、上層階級の社会政策が、上層階級の利益だけを中心に行動しているという罪悪感のために、事実を無視する階級的感情に基づいていることを知る。しかしながら、上層階級の者は特別に卓越した者——例えばトルストイ、無政府党のクロポトキン公など——でなければ、容貌が階級的美を表しているように、知識も、感情も全て階級的に作られることから脱却できない。良心に従って行動するとしても、必ずしも下層階級に利益をもたらす社会改良であるか否かが確実であるとは言えない。

だから、我々は断言する。社会民主主義を理解しない国民に対し、上から君主の命で社会政策を下すことは価値のないことだと。真に人格を持った公民国家は大化時代の朝廷の夢想によって産まれたのではない。全国民に国家の永久的存在という生存進化の目的が意識されるようになるまで国家意識が発展、拡張することによって初めて維新革命が起こり、それによって公民国家が生じたのだ。それと同じく、社会民主主義は一片の勅令によって建設されるものでないことは言うまでもない。いや、社会民主主義は決して藩閥内閣もしくは政党内閣によって実現されるものではないように、たとえ今日の社会党にいる二、三の先見の明がある者によって内閣が組織されようとも、今日の日本国民の水準で実行されるものでないことは言うまでもない。もちろん、権力階級が少し社会主義に傾くことと、社会主義を強烈に排斥することは、実現の速さに大きな影響を与えるだろうが、歴史学上の事実としても権力階級が自ら進んで消滅を提唱したものはない。また、良心が階級的に作られるという倫理学によっても、そのようなことを確証する理由は見つからない。各階級は各自異なった階級的利害を持ち、階級的知識、階級の感情を持ち、階級的良心を持っている（全て先に説いた『社会主義の倫理的理想』及び『生物進化論と社会哲学』を見よ）。

—このようなことであるから、階級的良心と階級的良心の衝突は、あたかも宗教を異にし、道徳を異にした時代の国家が地方的良心の衝突を戦争に訴えて決する他なかったのと

同じである。階級闘争は法律戦争に基づく強大な力による決定以外に解決の道はない。この階級闘争の歴史学と倫理学を理解しないため、維新革命を封建諸侯が尊王、忠君の立場から政権と土地を奉還したと考えるのである。そしてそれと同じ論理で、今日の経済的大名階級に向かい、生産権と土地、生産機関を国家に——ある者は天皇に——奉還させようと論じる講壇社会主義者が見られるのである（国家社会党の領袖である山路愛山氏<sup>57</sup>などは、未開人的な歴史家である点で、こうした議論の著しい代表者である）。幕末の志士にむやみに道徳を講義し、天皇を絶えず幽閉し、強制的に譲位させて圧迫していた貴族らに対抗させたとせよ。強者の権利によって得た土地と政権を持つ貴族らは、「奉還」を主張する者を自分の権利を侵害する者と考え、現在の世でも徳川氏は鎮圧政策を厳として継続しているだろう。自然法則に無用と誤謬はない。宗教、道徳を異にした国家と国家が戦争によって地方的良心の衝突を決定しているように、維新志士の民主主義の良心は、貴族階級の良心に向かって暗殺と戦争を図り、それによって打ち勝った。経済的維新革命は、ただ法律戦争によって強大な力による決定をするだけである。食人族に向かって仏教の原理を説き、食人族に作られた良心を一夜で入れ替えることなどできない。それと同じく、今の経済的貴族階級として作られた資本家、地主の良心に向かって生産権の奉還をくどくど言い立てればよいと考える国家社会主義者を放任すれば、社会民主主義の実現は地球が彗星と衝突した後にはかなされないのだ。それは、天下のことが全て啓蒙された後である。維新の民主的革命は、三百年の平和による下層階級の経済的進化と進化した権利思想の説明を古典、儒教に求め、長い啓蒙運動の後に貴族階級を略奪者と名付けて打倒した。彼らは中世の初めに権利者であったのに、社会の進化によって略奪者となっただけである。この社会進化は、ひとえに進化した権利思想によって社会が啓蒙されることである。今日に至るまで、個人主義に基づいた労働による権利として、個人が資本と土地を所有することは少しも略奪ではなく、当然の権利であった。しかしながら、「資本」が蒸気と電気の上にもたがり、他の小資本家を併呑し、高利貸しの資本に対抗できない零細自作農を併呑するようになると、明らかに個人主義の理想である今日の正義にも反する。社会民主主義の啓蒙運動によって社会全体が進化した権利思想に目覚めるようになれば、ここに経済的貴族は略奪者の名を負い、打倒されなければならない。

この社会進化の理法を理解しないため、山路愛山氏の一派などは維新革命と同じく権力階級を奉じて利用せよと言う。また、ある者などは現代日本の経済的進化が未だ非常に低級なものであるから、社会主義は尚早だという主張を唱えるようになるのだ。天地のあらゆるものは、ただ「力」による。社会は強大な力によって動く。勝てば官軍、負ければ賊軍。全ての善悪は階級闘争によって決定される。社会民主主義を真に理解する者は、明らかに覚悟せよ——今日の時代、社会民主主義者は罪人であり、上層階級は階級的良心に従っ

---

<sup>57</sup> 明治・大正期のジャーナリストで作家。民友社に入り、国民新聞の記者として優れた史論、文学論を発表した。特に、人物評論には優れたものが多い。

て処罰する権利と義務を持っているということ<sup>58</sup>！ 進化論の思想は世に絶対的な善と絶対的な悪があるという二元的対立軸を想定することを許容しない。哲学においても絶対的な無を仮定することは維持できない原理となった。善悪とは進化に応じたものであり、進化の程度を異にすることから生じるものにすぎない。古代には善であったことが、進化して中世になると悪になり、中世には善であったことが、さらに進化して近代になると悪になる。そして社会の上層階級は全てにおいて下層階級の理想として到達を努力する、つまり模倣の対象であるという点で善において最も進化した者である。だから、上層階級は今大体述べた理論から、未だ進化していない下層階級の階級的善を国家の名において犯罪とし、処罰する権利と義務を持っているのだ（この意味に従って今後の刑法学は組織されなければならない。『社会主義の倫理的理想』を見よ）。

しかしながら、いかなる個人であっても、その良心の進化は程度問題である。今のいわゆる社会主義者が個人主義の独断を継承し、むしろ社会の政治的組織である国家を否定することなどを見て、直ちに社会民主主義にも累を及ぼし、彼らに対抗する時の個人の自由を尊重しない良心で社会民主主義に臨むに至ってはどうしようもない。国家主権の現代において、国家機関が個人的利己心のために国家の一部として自分が意識する社会的利己心と矛盾する行動をとるならば、その言行は明らかに法理学上無効である。しかし、良心が命じる所によって行動するならば、それらよりは進化した良心であるが、進化していない犯罪階級の良心とともに法理学上の犯罪であることは言うまでもない。しかしながら、このようなことは法理学上の観念にすぎず、人の内心に立ち入って国家機関が良心の命令に従ったのか、はたまた利己心の発動を抑えられなかったのかなどを知る道がないことは言うまでもない。特に、多くは階級的良心によって行動するから、その言行が全て法理学上の効力を持つようになると、社会民主主義者という者は非常に厳かに考えなければならなくなる。冷静に全てのことを見よ。世間に悪人は非常に少なく、皆ことごとく自分が持っているだけの良心に従って行動しているのだ。社会党に対して鎮圧政策をとっている上層階級を見て、彼らの良心に背き、自身の悪に基づいていると理解することなどは我々が断じてとらない所である。彼らは現代の善に従って行動し、社会民主主義者は将来の善に従って行動しているのだ。こうなると、全ては強大な力により決定される。強大な力とは社会的勢力による（単純に中世時代の腕力が社会的勢力を集めたものであるからといって、今日の強大な力を腕力と速断してはいけない）。社会的勢力は、社会の進化に従って新陳代謝によって交替する。—だから、迫害とは「権力階級が存在を認め、そして社会の生存進化に害があると考える言行が社会的勢力を得られないようにする全ての手段である」と定義できる。人は先天的に自由ではない。平等でもない。自由を承認する社会、平等を原則とする国家の内において、その良心が自由・平等を尊重する良心として作られるからこそ自由・平等があるのだ。

だから、社会民主主義の時代といえども、個人主義が仮定するように、個人の自由は絶

---

<sup>58</sup> 階級闘争で未だ社会主義者は負けているから。

対的なものではない。裸で大通りを歩くとせよ。社会はその自由を尊重することができない。放火を敢行する、姦通を大っぴらに行うとせよ。国家の土地と生産機関を略奪して、私有財産制を復古させようと企てるとせよ。こうした自由は社会民主主義の強大な力で圧迫されることは言うまでもない（ただ、道徳が本能化し、個人的利己心と社会的利己心が衝突しなくなり、したがって他の個人もしくは個人の集合である社会と自由が衝突しなくなると言うだけである）。全ては強大な力によって決定される。宗教と道徳を異にした国家と国家が地方的良心の衝突を戦争によって決定してきた時代において、猛烈な攻撃はむしろ敵勢を強化すると言った知能のない者がいただろうか。今日の日本における社会党という者が権力者の強大な力に恐怖し、迫害はむしろ社会主義の勢いを強化すると論じていることなどは、法律戦争の兵学について非常に無知であると言う他ない。全ては啓蒙運動にある。全ては強大な力によって決定される。

権力階級の良心において、社会民主主義が社会の生存進化の目的に背くと考えるならば、法理学の観点から見て、社会民主主義の迫害は権利であり、義務でもある。

## 15-12 総括

したがって、この法律戦争による階級的良心の衝突というものを理解するならば、社会民主主義の実現後に資本家、地主をどう処分すべきかというような問題は、実際には枝葉の問題であるとわかるだろう。没収せよと言おうと、公債を与えよと言おうと——その公債が無利子であろうと、年単位での利子付きであろうと——、我々は決してこうしたことを論じたくないと思う。これは主義に基づく議論ではなく、政策論だからである。以上の説明によってわかるだろう。今日いかに上層階級が安心するような無数の条件を付け、また社会民主主義に対する一般の嫌悪感を表明する極端、過激というような悪口の中から逃げようとしても、経済的大名らが生産権を奉還すると申し出るような勤王論は期待できない。主義は主義として宣伝されるべきであり、理論は少しも例外を許容しない。極端とか、過激とか言うようなことは、その主義を抱く個人の性格もしくは社会的勢力の強弱を表すものであり、主義そのものは理論として必ず推理力の及ぶ限り、最後まで指示しなければならない。社会民主主義の最初にして最後の運動は、ただひとえに啓蒙運動であり、政策論などは啓蒙された社会的勢力のいかに伴う一時的な現象である。つまり、資本家、地主をどう処分すべきかといった問題は、今日の社会民主主義者にとって全く無用だということである。もちろん、政策は時代と地方によってそれぞれ異なるもので、あのフランス革命の時に司祭、貴族が財産を没収された。ただ、個人主義の時代として私有財産を失った彼らは直ちに社会の下層階級に落ち、退化するはめに陥るので、これは政策として失敗であった。それだけでなく、個人主義の理論からは、機械的に作られた国家がどうして不当な彼らの財産を没収する正当な権利を持っているのかについて説明することができない。だから、ドイツ及び日本のように、公債によって貴族の土地と代えたことは、社会の動乱を避けるという便利な政策だっただけでなく、私有財産制の時代の理論からも正当化され

るのだ。

しかしながら社会民主主義の革命は、法理上個人に分割されて存在する私有財産（ただし、実際は経済的貴族階級に占有された社会の上層部分の私有財産）を社会の全部分の共同所有に移すことである。個人主義の革命のように、法理上は上層階級に占有された社会の上層部分の私有財産を社会の全部分である個人に分割し、個人の私有財産を平等にしようという理想を抱くものとは全く異なっているのだ。歴史は繰り返すものではない。社会民主主義が実現され、全ての個人が社会の部分として共同財産の所有者となる時代において、個人主義時代の政策を踏襲しようとすることは政治学の無知に基づくのである。社会民主主義が真理に欠ける所がある、もしくは時代が進化しないために国民が広く啓蒙されないならば、強大な力がない<sup>59</sup>という階級闘争の理由から、政策論とは別問題として今日の略奪階級が痕跡を残すだろう。主義そのものの啓蒙運動以外に未だ何の必要もない今日において、個人主義時代の政策論を社会主義の上で繰り返すべきか否かを論争するようなことは、ただ盲動と言う他ない（まさに、今社会主義者と称する者は徹頭徹尾フランス革命時代の個人主義者である）。戦場に引かれる国民を見よ。「国家のために」という社会の主権発動によって生命そのものさえも没収されているではないか。

もちろん、我々は社会主義者という名が示すように、個人主義時代の思想のように個人を最終目標と考えない。しかし、個人の生命が今日の法律においてさえいかなる代替物によっても計算できないものだと知るならば、尊い個人の生命さえも国家の利益のために犠牲として没収されている社会主権の今日において、社会の主権が社会の生存進化という利益のために既にその「最高の所有権」に基づいて持つ土地と資本を経営するのに、どんな法理学が妨げるといえるのか。マッカロック<sup>60</sup>は経済学以外のことを理解せず、唯物論によって、労働者は長い時間と大きな苦勞によって作られた機械である言っている。その運転によって毎年父母、妻子を養育する点では、似ている所もあろう。それならば、その生命を持った機械が最もよく運転する時期、つまり徴兵されている期間を社会の利益のために社会の主権によって使用し、必要な場合には戦場に送り、機械そのものを破壊する自由を持つ今日の社会主義を表す法律の下で、資本を略奪したものである生命のない全ての生産機関を国家の所有権により、国家が自身の利益のために使用するのに、どんな権利が拒むだろうか。私有財産制の今日、労働面で劣っている婦人もしくは全く働けない子供を残し、哀れむべき生産機関は一言も賠償と言うような汚らわしい言葉を口にせず、ほほえみながら犠牲となるではないか。土地と資本の公有は、資本家と地主にとって犠牲ではない。彼らにその地位を維持させ、その地位にまで進化させてきた社会全体とともに公共財産の共同所有者にすることなのだ。今日のように、妻子を労働の道のない下層階級に陥れることもなく、ともに公共的経済を経営することにより、大いに経済的進化をもたらし、社会財

<sup>59</sup> 原文では「強力の薄弱」となっているが、薄弱のニュアンスが表現しにくいので、意識した。

<sup>60</sup> 原文では「マカルロック」となっているが、十九世紀初頭の経済学者、マッカロック (Macculloch) (一七八九—一八六四) のことであろう。

産の共同所有者にすることなのだ。ただ、社会の生存進化という目的、理想の下で、啓蒙運動によって社会的勢力となればよい。私有財産制の今日に華族が正当であるとしても、社会共産制が実現される時においては、経済的家長君主らが公債の所有者として残ることは、完全に別の種族である人類に獣の尾があるようなことである。昔キリストは、「カイザル（皇帝）のものはカイザルに返し、神のものは神に返しなさい。」<sup>61</sup>と言った。社会民主主義の全ての運動は、ただこのようなものなのだ。——世にカイザルに属するものはない。神のものは神に返し、社会のものは社会に返せ！

社会民主主義は、維新革命以後の法律的理想として掲げている国民の全部が国家であるという国家の主権と国民の政権により、国家の経済的内容を理想に到達させようと経済的貴族らを打倒することにある。そして個人主義時代のフランス革命のように、国家を否定することではなく、ただ真理の下で結合された社会的勢力を国家機関によって国家の意志として表白すればよいのだ。そしてその階級闘争は法律戦争である。

---

<sup>61</sup> 新約聖書「マタイによる福音書」(第二十二章二十一節) などにある一節。